

茨戸川の幸

大河石狩川の終着地・河口の石狩市はサケやニシン漁で古くから栄え、海の豊かな恵みを受け発展したまちです。

茨戸川は、石狩川が生振新水路を通るよう直線化されたあと残された旧石狩川で、ここもまた古くから漁場として利用されてきました。

茨戸川、真勲別川、石狩川に囲まれた生振地区の開拓民は、苦しい生活の糧を補うため漁場に出稼ぎしたといえます。これが生振の漁のはじまりといわれ、小規模ですが茨戸川の漁の灯火を消すことなく、引き継がれています。

石狩市では昭和20年代、石狩浜にニシンが消え、サケ漁も低迷する時期がありました。そこで、目を向けられたのが茨戸川です。

昭和34年から茨戸川でのワカサギ増殖事業が始められ、ワカサギの漁獲量は当時の石狩町漁業総生産高の約25%を占めるまでに成長しました。増殖事業はその後も継続、一般開放もされ、今では冬の結氷した茨戸川を、ワカサギ釣りのカラフルなテントが彩るほ

自然があふれる
茨戸川



どです。

生振に生まれ育ち、漁歴30年以上の岡観光水産の岡つとむ社長に、この日の漁に同行させてもらいました。

茨戸川に仕掛けられた定置網と

カニカゴからは、カワガニ（モクスガニ）、

ワカサギやウグイ、コイ、カワエビ（スジエ

ビ）がつぎつぎと揚げられ、

ピチピチと跳ねます。岡観光水産は、

茨戸川漁草創から名を連ねる老舗で、ワカサギの佃煮、ウグイの甘露煮など評判の加工品もつくっています。岡さんは「むかしから生振漁師に伝わる味。ただ、北海道の人は川魚を食べないのが残念だね」と言います。

茨戸川は近年、札幌市北部の都市化等の影響で、水質の悪化が問題となっています。これを受け、平成14年から「茨戸川清流ルネッサンスⅡ地域協議会」が、水環境の改善を緊急的かつ重点的に推進する行動計画を策定。学識者、NPO、住民、河川管理者、下水道管理者等が連携し水質向上に取り組んでいます。

地域の人たちや私たちが身近な自然に関心を持ち、主導的に関わっていくことが、自然再生にはとても重要なことなのです。郷土に伝わる川の食文化や大切な自然を守り伝えていかなければなりません。



石狩の漁業を支えたワカサギは
茨戸川の代名詞

石狩川ヤツメ文化を未来へ

サケとともに石狩川でよく食べられていた、ヤツメウナギ(カワヤツメ)の代表的な産地は江別市です。

ヤツメ漁は明治中期に新潟県をモデルに始められたといわれ、今も釣り鐘状のドウと呼ばれる特殊な漁具を使う光景は、江別の



ヤツメのマンホール

風物詩になっています。食糧生産が充分でなかった開拓期にはヤツメウナギは貴重な栄養源として、当時の人々の厳しい労働を支えました。一方現代でも、目に良いとされるビタミンAをたっぷり含み、成人病を予防する効能が注目を集めています。蒲焼きや唐揚げ、柳川などメニューも豊富で、ヤツメの需要が絶えることはありません。

北海道のヤツメウナギの漁獲量ピークは昭和63年の236トンで、石狩川水系でも132トンを記録。しかし、その後急激に減少し、全国からファンが集う江別市恒例「八ツ目うなぎ祭り」(4月)は、平成14年から延期になっています。

この状況下、「ヤツメ文化を守ろう」という機運が高まり、石狩・空知支庁による「石狩川ヤツメ文化保全再生事業」がスタートしたのは平成16年のことです。ヤツメの生息や産卵のための調査や親魚の保護、増殖技術の開発等を柱に、漁業者・研究者・河川管理者が参加しています。現在、漁業者がふ化技術の指導を受け、自主的な増殖を目指しています。

また、「ヤツメを考える会」を開き、ヤツメ



ヤツメ漁に使うドウ

料理を提供するなど、啓蒙にも努め、イベントや、ヤツメを教材にした副読本の小学校への配布も検討されています。

「北海道らしい食づくり名人」にも選ばれた北の幸こじま本店・小島等店長は、「生まれ育った郷土の味を守りたい」と、30年程前の開店当初からヤツメ料理をつくり続ける第一人者です。

ヤツメ再生はまだ始まったばかりです。住民が郷土の文化を知り、関心をよせる事が再生を支える力になります。

米づくりにかけた執念

石狩川中流域は、今では北海道の米づくりの中心地帯ですが、寒冷地のため明治時代の後半まで米は作れませんでした。明治の前半には米はたいへん貴重なもので、正月やお盆などに数回しか口にすることが出来ないう時代が続いていました。

屯田兵も入植して3年間は、本州から運んだ扶持米を支給されていましたが、その量はごくわずかでした。ふだんの主食は、麦や



滝川市を流れる石狩川

粟、稗などの雑穀に少しの米が入ればいい方で、馬鈴薯や南瓜が主食のこともありました。

開拓史は、ケブロンなどお雇い外国人の意見に従い、寒さの厳しい北海道には稲作は不向きで、パン食にするべきとしていました。しかし本州から移住してきた人々は米に対する郷愁を断ちがたく、ひそかに米づくりに執念をかけました。

滝川の最初の米づくりは明治25年で、屯田兵の石丸辰吉さん、佐藤竹蔵さんが「赤毛早稲」を苗仕立てで作付けしたのが始まりです。与えられた土地の一部に、石狩川からの取水が可能な谷地があったので、20坪ほどを開墾して試験的に稲を植えました。その年の秋には実を付けませんでした。草丈も伸び、粉がかなり付いて、これなら見込みがあると必死で頑張りました。

当時は米づくり専用の器具や機械もなく、そのつど自分で工夫し、研究しながら新しく道具をつくっていきました。明治28年になってようやく、1反あたり2・8俵ほどの収穫に成功しました。

明治の中頃には道庁も稲作を奨励するよ



灌漑排水溝

うになり、政府が明治35年に「北海道土功組合法」を公布したことで、多額の費用を必要とする水利灌漑と造田事業に対する融資が受けやすくなりました。本州の米騒動、米の値段の高騰といった経済的背景が稲作熱を一層刺激し、大規模な灌漑溝の開削が行われるようになりました。

石狩川流域の米づくりの歴史は、明治からの灌漑工事、すなわち用水路の整備と洪水による浸水を防ぐための排水・治水など水との闘いの歴史でした。

昭和30年代になって、広大に広がっていた泥炭地の土地改良や米の品種改良も積極的に行われ、その後、滝川を含む石狩川中流域は北海道有数の米どころとして発展していきました。

雨竜川と稲作の発展

秩父別町は雨竜川を境に、沼田町・北竜町・妹背牛町に接しています。雨竜川は三日月沼の多いことからわかるように、開拓期には原始河川特有の蛇行を繰り返していました。沼田大橋から妹背牛を経て、石狩川との合流点までの平野部は特に蛇行が多く、昔から度重なる洪水、氾濫が起こっていたのですが、そのたびに上流から肥沃な土壌が運ばれてきて堆積し、良質な沖積土地帯になっていきました。

秩父別の開墾が順調に進んでいくと、家畜用の飼料畑などの土地の確保が必要になっていきます。そこで肥沃な河川敷地に着目しました。しかし明治29年に制定された河川法では、河川敷地を使うためには河川管理者である国の許可が必要でした。許可の申請が年々増加していったのですが当時は畑作のみというのが条件だったので、蕎麦やとうもろこし、麦などが栽培されました。

秩父別の創設当時は、水稻耕作は禁止されていましたが、秩父別の北部などは強酸性土壌のうえ湿地帯が多かったため、畑作だけ

では生計が成り立たず、次第に稲作への欲求が強くなつていきました。

水路もなかったため、低い水溜まりの狭い土地や湿地帯、自分の宅地内などでの試作が始まります。やがて雨竜川の支流・境川や秩父別川などの水が利用されましたが、夏になると水不足のため、時間割を作り水の配分をしていたそうです。明治30年によく試作の許可が下ります。

その後、雨竜川から水を引く、水田灌漑用水路の工事が行われてから水田耕作が急速に普及していきます。戦時中の昭和15年ころから、食料不足になりそれを補うための食料増産が叫ばれ、水田耕作がより奨励され

るようになります。

昭和39年に河川法が抜本的に改正され、41年からは河川敷地での水田は認められず、畑地に転換する指示が出されました。営農基盤を失う事態に危機感を抱いた住民は、堤防敷地利用組合を結成して水田耕作を認めてもらう運動を起こし、やがてその運動が功を奏し水田は守られました。

雨竜川は昭和40年ころまで原始河川のままだったので例年、融雪期や大雨のときに沿岸地帯の住民は、しばしば水害に悩まされてきました。なかでも昭和30年7月、記録的な降雨が続きました。

鷹泊ダムの貯水も限界に達し、とうとうゲートを開放しました。

この洪水によって秩父別町の約3分の1が冠水・浸水の大被害を受けたのです。これを機に築堤など雨竜川の治水工事が促進されていき、秩父別町は道内有数の穀倉地帯となりました。



水を求めて

愛別町は、明治27年に和歌山県、岐阜県、愛知県から179戸が入植したのがはじめです。その2年後に鷹栖村(現在の鷹栖町)から分村し、上川郡愛別村となります。名前の由来はアイヌ語の、矢のような川「アイペツト」からきています。愛別町は稲作が中心ですが、近年は「きのこの里」としても有名で、道内最大のきのこの産地となっています。

上川町28線の沢の近くに、愛山頭首工、別名「愛山の水門」があります。明治35年頃からこの28線の土地や湿地で米を作っていました。当時北海道では米作は不可能だと言われており、ある地方では屯田兵が米を作ろうとすると処罰されるといふ規則さえあったほどです。政府や開拓使の方針は、ケプロンなどの指導による畑作・畜産を中心とした米国式の農業で、米づくりは禁止していました。

米ができれば藁も当然ありません。藁は草履やわらじ、蓑などの防寒具、雨具として必要なものでしたし、移住してきた人々はいままで米を主食としていましたから、「い

つか米の食える百姓になりたい」という強い願いがありました。

愛別のあちこちで米づくりがはじめられます。米づくりに水は不可欠なものです。人々は必死に水利権を獲得するために努力しました。しかしすべての地域の人が水利権を得たわけではありません。

明治45年に稲作農民たちがアンタロマの造田計画を立て、水利組合を作り水利権獲得のため関係者に働きかけました。27線と28線の土地の一部を水路用地として買収しました。

大正4年には関係者40名が集まり、水田面積150haで水利権獲得の願いを提出し



ているのですが、この面積は現在の愛山地区の水田の約6割にも相当する広大なものでした。

ようやく、大正8年7月に正式にアンタロマ水利組合が設立され、9月に水路の工事に着手、11月に完成します。その水路は6km近くにもおよび、大正14年にできた19線の発電所あたりで石狩川に放水されました。そのときの水門が「愛山の水門」で、現在のものより100mくらい下流の地点にあったそうです。

しかし昭和25年の洪水で決壊してしまつたため、復旧工事がなされ、さらに愛別町土地改良区の発注した道営による全面的な復旧工事が行われて昭和47年に完成します。それを記念して大きな石が置かれています。文字は刻まれておらず、横に白い工事標識の杭が1本と、水利権を表示した看板が立てられています。この水のほとんどが愛山地区の水田に利用されていて、東雲地区の大部分は少し上流の沢から流れ出すパンケフヨマナイ川の水を引いています。

愛別の米づくりを目指した人々は、水を求めてその夢を実現していきました。

十勝岳の噴火と水田開発

富良野原野で、水稲の試作から本格的に造田が発達したのは富良野川の流域でした。

大正15年に十勝岳が爆発して、鉍毒水によつて川の水が酸性になるまでは、富良野川はきれいな川でした。水温が割合高く、水口が少ないという特色は米づくりには強みでした。富良野川を水源とする灌漑溝が発達し、用水組合を結成して水利権を得ていました。水田面積の増加と、水源地帯の開発によつて水不足が発生すると、水を求めて上流と下流で争いが起きてしまい、ときには流血の惨事が起きたこともありました。

大正12年7月、連日の好天が続く、富良野川の水は枯れてしまいました。下流の村から30人くらいが上流の水門に達し、野宿をして番を始めました。それを見た上流の人々も大勢が集まってきた、今度は逆に川を全部止めて対抗します。下流の人々は飲食店に溜まり、酒を飲んでで勢いをつけて押し寄せてきます。上流と下流の人たちが水門の開閉をめぐる対立が激化し、石が飛び交う「石合戦」にまで発展して、巡査や消防までが出

動しました。誰かが死亡したという噂まで流れ、朝が明けるまでこの争いは続きました。その後、用水土功組合が結成され、貯水池を作つて水量の増加を図るなどの対策が取られ、再びこのような事が起こらないように努めました。

上富良野町の水田の歴史にはもうひとつ、十勝岳の爆発を抜きには語る事はできません。「十勝岳泥流地年次別災害復旧耕作ノ状況 上富良野村 昭和8年8月調」という一冊の書類には、耕地復旧までの苦労とそれに耐えてきた住民の血涙の年月が記されています。大正15年5月の十勝岳爆発の状況を次のように伝えています。

「十勝岳大爆発ニ依リ泥流奔流ス 泥流ノ全面ニ帯亜硫酸瓦斯幕ヲ以テ 樹木岩石等ヲ乗セタル泥流団来ル 硫黄ノ香鼻ヲツキ脚絆等ニ附着シタル泥ヲ火上ニ振ヘバ花火ノ如ク火ヲ発シテ燃ユ」「水ノ貯溜セル所ニハ褐鉄様ノ沈殿物を生ジ復興ニ当リテハ地面ヲ乾燥セシメタル上「サラヘ」ニテ掃キ集メ焼却又ハ宅地等ニ埋メ込ミタリ」「貯溜セル水ハ宛宅醬油ノ如キ色ヲ呈シ酸味強シ」「動植物等一切生成セズ」。

この爆発によつて発生した泥流のために、上富良野町、美瑛町合わせて144人の死者・行方不明者を出し、開拓地などは壊滅的打撃を受けます。耕地に流れ込んだおびただしい数の流木を撤去し、泥流を洗い流し、荒れた土壌の改良など、長い時をかけた復興の苦労がありました。

この十勝岳の爆発を機に、強大な破壊力を持つ泥流のエネルギーを無力化・低減化するための火山泥流対策が施されるようになりました。

